



目 次

ごあいさつ	2
浜松地域テクノポリス計画の概要	3～5
第6回「母校を訪ねる会」を開催	6～7
支部・同窓会・O B会だより	8～9
英国の道路	10
キャンパスミニマモ	11
昭和62年度通常総会通知	12
会員総合名簿発行、その他	



一般教育・情報関係研究棟完成予想図 鉄骨鉄筋コンクリート造8階建1部2階 延床面積6,120m²
61年11月着工 63年4月完成予定
建築場所：図書館北側



ごあいさつ

日本大学工学部事務局長

佐藤光二

校友の皆様には、各分野におかれて、全国各地はもちろん、海外にも進出され、先端技術の開発等に目覚ましいご活躍をされており、心からお慶び申し上げます。同時に、日頃母校工学部に対して暖かいご協力・ご支援をいただき、厚くお礼申し上げます。

私こそ、昨年7月に石田昭二事務局長の後任として当学部に赴任いたしましたが、今回校友会報の発行にあたり、ごあいさつの機会を与えられましたことは、この上ない光栄と存じております。従来、法学部・経済学部という、社会科学系学部の勤務が長かった私としましては、工学部という、科学技術の先端を行く学部に勤務するのは初めてのことですので、いろいろととまどいもあり、教職員諸氏はもちろん、校友の皆様にも、ご迷惑をかけることがあるかもしれません、精一杯職責を全うする覚悟でありますので、石田前局長同様、どうかよろしくご指導・ご鞭撻の程、お願ひ申し上げます。

さて、本年は当学部創立40年という意義深い年であります。この長い歴史を刻むことが出来ましたのも、偏に校友各位の日頃の母校に対する暖かいご支援の賜と深く感謝申し上げる次第です。40年といえば、人間なら「不惑の年」といわれております。既にご承知のように、最近の科学はまさに日進月歩の時代で、私個人のような科学に「弱い」人間にとっては戸惑うことの多いのが正直な感想ですが、学部としては、このハイテク時代にも惑わされず、逆にそれをリードする気概を持って、多様化する産業界の要請や、変化する社会状勢に対応できる能力を育成するため、教育・研究内容の充実を計り、教育システムも変化させていく必要があると思います。そのために、当学部においても、学部長以下一丸となって、より一層優秀な教授陣の充実や諸設備の整備・新設などを計って、50周年、60周年に向けて前進していく所存です。

我が日本大学も、昭和64年には創立100周年を迎えます。さまざまな記念事業も計画されておりますが、校友各位におかれましても、上記事情ご賢察の上、今まで以上に、暖かい眼で見守っていただき、ご協力・ご支援を賜わりたいと思います。

末尾になり大変恐縮ですが、校友各位の益々のご健康とご活躍をお祈りいたしまして、ごあいさつとさせていただきます。

(日本大学評議員・参事)



ごあいさつ

日本大学工学部校友会会长

武田仁幸

事物はみな年を経れば変る。論語には人の一生を、子曰、吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲、不踰矩。

15才を志学、30才を而立、40才を不惑、50才を知命 60才を耳順、70才を古希、77才を喜寿、88才を米寿、99才を白寿と語っている。

70才以上のことは日本独特の祝い辞のようだが、いずれにせよ、私も五十路を歩む身となりこの言葉の意味が身近かに感じられるこのごろです。

さて、昭和22年に工学部が郡山に開設されてから、本年で早や40周年を迎えることになりました。校友も26,000余名となり、国内はもとより海外でも活躍しております。きっとそこには、日本大学の建学の精神を体し、日大魂を胸に秘めたエンヂニアの歌声があるものと思います。

ご承知のとおり、大学の真価は、校友の活躍によってこそ認められるものでありますから、皆様のご活躍に感謝申し上げるとともに、一層の御発展を祈念致します。省りみれば、工学部40年の歴史は郡山を中心とした地域社会の御理解と御協力があつたればこそ刻みこられたものであると思います。この機会に校友を代表して、衷心より御礼を申し上げる次第であります。

つきましては、昨年12月3日、30万郡山市民が待ちに待った、郡山市を中心としたテクノポリス開発計画が国より承認されました。日本大学工学部が「学」の一翼を担い、産・学・官一体となって力強い活動を推進した結果、実現したものです。まさに、工学部には、地域のオピニオンリーダーとしての責務を全うすべき絶好の機会がきたと思います。

筆を後にしてしまいましたが、新卒業生諸君、御卒業おめでとう、諸君には、日本大学の卒業生として誇りと意気をもって雄々しく巣立っていただきたい。ここでいつも私の心にある『人の道』を座右として贈り、はなむけのしるしと致します。

忘れてならぬものは恩義
捨ててならぬものは義理
人にあたえるものは人情
繰返してならぬものは過失
通してならぬものは我意
笑ってならぬものは人の失敗
聞いてならぬものは人の秘密
お金でかえないものは人の信用

(土木工学科3回卒、東和工業㈱)



浜松地域テクノポリス計画の概要

静岡県商工部テクノポリス推進対策室

主幹 藤田 協右

はじめに

卒業して早や22年が経過し、現在は、静岡県商工部に籍を置いて「浜松地域テクノポリス」建設に従事しております。

今般、私の“第二の故郷”郡山がテクノポリス建設を目指して始動したと聞き、これも何かの縁かと考えております。

そこで、一足先に建設に着手した「浜松地域テクノポリス」の概要を紹介し、郡山のテクノポリス計画推進のお役に立てればと思い筆をとりました。

1. 基本理念

浜松地域は、輸送用機械、楽器、繊維の三大産業をはじめとする活発な産業活動が展開され発展してきた工業集積度の高い地域であり、これらの産業自体が併立し、競争の中で生まれ育ったもので、内発的な技術開発力や創造の社会的土壤をもっており、「やらまいか精神」に代表される旺盛な企業家精神が息づいています。

浜松地域テクノポリスは、これらの地域特性を今後の先端技術の開発推進に結びつけ、計画的な都市整備を図りつつ、これまでの三大産業を中心に地域産業の新たな展開を促し、知識集約度の高い、より高度な産業構造を持った拠点都市を建設することによって、全県の産業振興の拠点として、計画的なまちづくりを進めしていくことを基本理念としています。

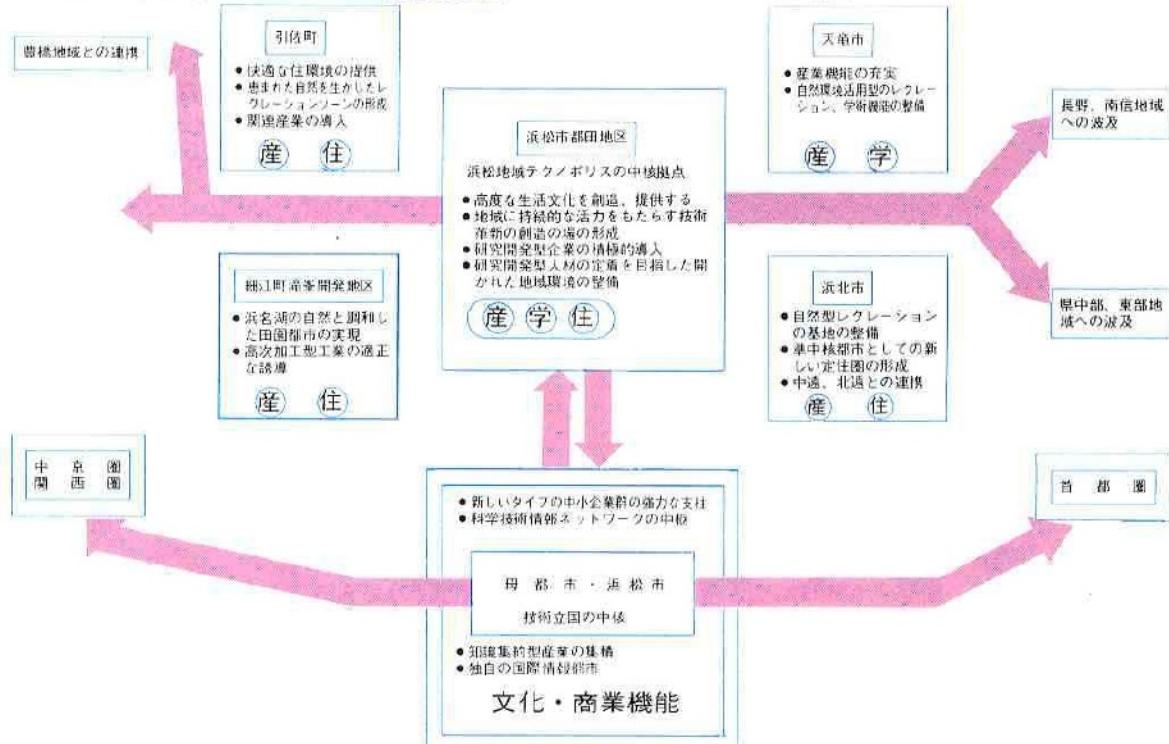
浜松地域は、温暖な気候と東西大都市圏のほぼ中央に位置する地理的優位性から、今後首都圏等の過密地域からの企業誘致の受け皿としての役割を果すべき機能が期待されています。

2. 地域の設定及び計画期間

浜松地域テクノポリスは、人口52万人を擁する浜松市を中心とし、社会的・経済的に強い結びつきを持っている浜北市、天竜市、細江町、引佐町の3市2町により構成され、その面積は概ね65,300haです。

建設計画は、昭和65年度までに概成することとしており、最終完成目標年度は、昭和75年度です。

図-1 浜松地域テクノポリスの機能分担図



3. 工業開発の目標水準

浜松地域は、輸送用機械、楽器、織維の三大産業に加えて、近年、光応用機器や電子関連機器の分野の進展に伴うこれら企業群の成長等、巾広い企業集積を有しています。これら既存の企業集積に加えて、新たに電子計測器や光学的計測装置等の高度技術開発企業やこれらの関連企業の立地も着実に進んでおり、今後、既存企業の生産性の向上や付加価値生産性の高い企業の新規立地をさらに進めることにより、昭和65年までに、表-1のように、工業出荷額、工業付加価値額、工業従事者数をそれぞれ、2兆8,910億円、1兆300億円、11万9,500人と設定するとともに、工業付加価値生産性を862万円／人とすることを目標としています。

表-1 工業開発の目標水準

(昭和55年価格)

	昭和55年	昭和65年	昭和55年～65年平均伸び率
工業出荷額 (億円)	15,613	28,910	6.35%
工業付加価値額 (億円)	5,018	10,300	7.46
工業従事者数 (人)	102,038	119,500	1.59
工業付加価値生産性(百万円／人)	5.29	8.62	5.00
人口(人)	619,626	679,000	0.92

(注) 昭和55年の工業付加価値額は「通商産業省工業統計表（従業者4人以上の事業所）」による。

昭和55年の工業出荷額及び工業従事者数は「静岡県工業統計調査結果報告書（全事業所）」による。

4. 具体的目標像

(1) 産業コンプレックス（産業集積）

浜松地域の産業コンプレックス形成の方向は、次の3点を基本としています。

- ・21世紀に向けての経済社会環境に適応する産業コンプレックス。
- ・浜松地域の次世代の基盤、あるいは研究開発課題に適合した産業コンプレックス。
- ・新しいタイプの中核企業群（研究開発型企業）の育成振興と関連した産業コンプレックス。

第1点については、今後、情報システム化などが家庭及び社会に浸透し、生活様式、社会行動等の多様化が予測されることから、21世紀に向けての価値観、社会構造、社会行動の変容にあわせて形成をしていきます。

第2点については、既に当地域の既存産業のなかに動きがみられますぐ、地域の技術目標として、メカトロニクス、光技術、マイクロエレクトロニクス、航空機、新材料の5つの研究開発課題を設定し、これらを基盤とした光技術産業、高度メカトロニクス産業、ホーム・サウンド・カルチャー産業、家庭映像情報システム産業を中核産業として位置づけ、地域の中から誘発、展開することとしていますが、これを補完すべき業種・企業については、地域外から積極的に導入する

こととしています。

第3点については、当地域には、コンピュータ関連機器、計測機器、医療機器などの研究開発型企業が多いことから、これらの育成に努め、その中から次代の浜松地域を主導する新たな産業の展開を促進します。

(2) 研究開発コンプレックス

メカトロニクス、光技術、マイクロエレクトロニクス等の基盤技術は、当地域の将来の産業構造を規定していくとともに、これらの技術が秒進歩といわれる激しい技術革新が展開されている分野であるだけに、研究開発機能の充実、強化が必要とされます。

特に、浜松地域では機械加工技術は進んでいるものの、エレクトロニクスの技術基盤は今後に待つ部分が多いため、エレクトロニクス関連の研究開発機能に重点をおいた研究開発コンプレックスの形成を図ります。

具体的には、地元の静岡大学工学部、電子工学研究所、浜松医科大学をはじめ、研究開発型企業等の共同研究の場である(財)電子化機械技術研究所、あるいは県の既存2試験研究機関の統合による中核的な試験研究機関の先行的整備を行い、民間試験研究施設をはじめとした地域のニーズに合致した施設の立地促進を図ります。

5. テクノポリスの推進体制

浜松地域テクノポリスの産業技術振興については、浜松地域の産業界をはじめ、県内全域にわたって民間活力を積極的に活用することとしています。その産業技術振興の中核的な機構が、財團法人ローカル技術開発協会と財團法人電子化機械技術研究所です。この2機関を浜松地域テクノポリスの産業・技術振興機構と位置づけ、前者は、調査・研究など総合的な推進を図り、後者は、個別の研究実施等技術の応用、適用面の役割を担い、产学共同研究、その他の技術振興を効果的に進めることとしております。

6. 浜松地域テクノポリスの進捗状況

浜松地域は、東西大都市圏の中間に位置するという地理的条件や、温暖で住み易い自然条件等から土地利用が進んでおり、農業投資も濃密に行なわれている地域で、テクノポリス建設のために大規模な一団の土地を確保することは非常に困難な地域です。

そこで、開発に当っては、必要な機能を必要な場所に分散配置し、これら機能を道路によって有機的に結びつけるクラスター（ブドウの房）状開発を計画しています。

まちづくりであることから、“核”が必要となりますのが、その核が浜松市郊外にある都田地区です。

(1) 浜松市都田地区

ここでは、産業用地55ha、学術研究用地34ha、住宅用地42ha、テクノセンター等をバランスよく効率的に

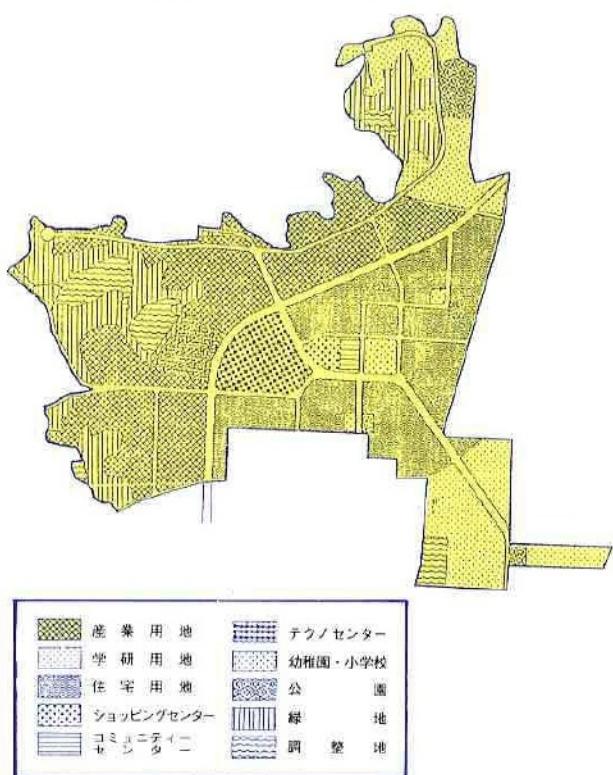
配置し、地域の豊かな伝統と綺麗な美しい自然の中に、先端技術産業の活力が導入された新しいまちづくりを目指し、総面積242haの開発事業を進めています。

この開発事業の特色は、土地所有者にも開発利益の一部が享受できるようにしたところにあります。

浜松市が事業主体となって、すべての土地所有者から7割の土地を均等に買収し、土地区画整理事業により集合換地を図り、市有地は産・学用地とし、民有地は住宅用地として一団の土地として利用できるようにしようとするものです。

この方法では、開発者だけでなく、3割の土地を有するすべての土地所有者にも開発利益が還元されるとともに、土地所有者自らまちづくりに参加することとなり、自分達の“まち”として育てて行くことに大きな期待が持てます。

図-2 土地利用計画



(2) 浜北リサーチパーク

浜松地域は、日本で最初にテレビの受像に成功して以来、浜松高等工業専門学校とともに、光技術の研究では全国にもほこれる光技術の集積地域です。

そこで、浜松地域テクノポリスのメインテーマの一つである光技術産業のより一層の集積と振興を目指して、浜北市平口地区の約17haの土地に光技術産業の総合的な研究団地を建設しています。

光技術は、エレクトロニクスにおいて電子が果たしてきた諸機能を光によって実現するのみならず、電子

が果たし得なかった新たな機能をも達成しようとする画期的な技術であり、その応用は、通信、計測、制御、情報処理等広範囲にわたっています。

当地区では、静岡県企業局が事業主体となって造成を行い、「浜松ホトニクス」及び関連企業が、光技術研究の“メカ”建設を目指しています。

(3) 細江テクノランド

浜松地域は、異業種交流の先進地として全国的にも広く識られているところですが、この異業種交流への参加企業が、テクノポリスの指定を契機に全国でも例をみない異業種の団地造成にとりかかっています。それが細江テクノランドです。

この特徴は、従来の一般的な団地が同業種の集まりであったのに対し、当団地は、機械、電気、輸送用機械等の製造業の異業種の集団化団地であるうえ、どの企業（全13社）も研究開発型の企業であり、研究、開発及び製造部門を集団化し、異業種交流の活発化と技術開発力の強化を図ろうとするものです。当団地から新技術、新製品が開発されることが期待されています。

(4) 浜北市下堀谷地区

当地区では、土地信託制度導入の可能性について研究を進めています。

最近は、各方面で民間活力の利用が叫ばれ、その中で国・公有地の土地信託がとりあげられています。

当該地は、浜松市街地の中心部から約17km北方にある丘陵地で、面積約80haの内8割の土地が財産区有地となっています。

土地信託は、地価の高い市街地中心部で行なわれることが一般的であり、実績もありますが、当地のような地価の低い郊外地での実績はほとんどなくその上、財産区という特別地方公共団体の所有地を信託することは全国でも例がありません。

社会資本の少ない郊外の丘陵地での開発の可能性、採算性、信託の形態、テナントの誘致の可能性等、各種の課題について民間企業と共同研究を続けていますが、実施までには多くの時間がかかるものと考えています。

おわりに

テクノポリスの成否のカギは、产学研の連携にあるのではないかと考えています。現状では、国立大学は開かれた大学とは言い難く、地域産業界のニーズを満たすことは望めません。そこで、私立大学の力が必要となります。

地域産業界との技術交流、人材交流、共同研究等を積極的に行うことにより、地域産業の振興・地域経済の活性化が図られると考えます。

母校日大のより一層の発展を祈っております。

(土木工学科第12回卒)

第6回「母校を訪ねる会」を開催

—前日の同級会も盛り上がる—

昭和61年10月26日(日)、第6回「母校を訪ねる会」が工学部と校友会の共催で開催された。今回は第14回卒業生792名が対象で、その内86名の出席者があり、学部祭(北桜祭)開催中で、多数の市民が集まる賑やかな雰囲気に満ちた中で盛大に開催された。当目はうらら



かな秋晴れで、北桜祭を校友教職員の案内により、懐かしい学内を見学した後、正面玄関前で吹奏楽部による歓迎演奏を受け、前庭で記念撮影を行なった後、中講堂会議室において懇談会が開かれた。本郷忠敬工学部長、武田仁幸校友会長の挨拶があり、引き続き隣の

大會議室に席を移して、佐藤光二工学部事務局長の乾杯の音頭で懇親会に入った。出席した方々は異口同音に昔や現在の話に花を咲かせ、各科ごとの校友からテーブルスピーチをいただき、終始、和やかなうちに懇親を深めた。最後に全員で校歌、若きエンジニアを合唱し、再会を約束して、広川友雄名誉教授の万才三唱にて幕を閉じた。



「母校を訪ねる会」に参加して

田辺 宏

第6回母校を訪ねる会へお招きいただき、この企画をなされた校友会及び学部関係の皆様方にあらためて御礼を申し上げます。

小生は福島県庁に勤務している関係上、職務上技術の問題が発生した度毎に母校の世話をなっていましたが、何回かおとずれたことがありました。20年前全国に分散した仲間と母校を訪れ、先生、校友と会うということは感慨一しおありました。

「北桜祭」は当時は「学部祭」といっていましたが、真剣な学生諸君の姿を見ると20年前の我々のそれを見るようで何か胸にせまるものがありました。

私の勤務している福島県庁は土木技術者約800名おりますが、内200名は日大OB(理学部・生産工学部を含む)で、県としても日大の技術は存在が大きく、その根拠地は郡山ですので、この種の企画をさらにしていただき、母校との結びつきを太くしていただきたいと思います。日大の技術、結びつきの強さを肌で感じることによって母校の技術を世に広める自信がわき技術を通じ日大の存在をさらに大きくできるものと信じます。

今回の母校を訪ねる会の前夜には、土木工学科の同



級生達と、郡山に勤務中である三浦昌雄君の案内で市内を探訪し飲み明かしましたが、これもまた格別で心に残るものがありました。

(土木14回卒 福島県いわき建設事務所)

母校を訪ねて

建築アカシヤ14期生 幹事 前田 明博・橋口 章
卒業後20年の歳月が流れたんだなあと「母校を訪ねる会」に出席しつくづくと感じ得た「アカシヤ14期生」の32名は、10月26日母校管理棟前において熱烈な歓迎を受け、参加した誰もが素晴らしい後輩達に惜しみない拍手を送りました。想えば20数年前は兵舎の残る食堂で寒さに震え建築研究室では「学部祭」の準備で徹夜し、当時出始めのカップラーメンを電熱器で沸かし3分間待ったものです。そんな昔話を165名の案内発送中96名の出欠の返事を頂き同窓生と「郡山ビューホテル」で25日の午後7時より9時半の2時間半、谷川先生、師橋先生を囲んで予定の時間を大巾に超過し、最後に校歌、エンジニア校歌を合唱し和氣あいあいのうちに二次会へと散会しました。出席出来なかった校友からはメッセージで非常に残念がって次回には何としても参加したいとコメントがあり、このような企画をして下さった校友会並びに学校関係者に感謝をし「アカシヤ」を母校の代名詞として第2の故郷をいつまでも忘れられない素晴らしい日本大学工学部であらんことを願ってやみません。

(前田・旭建設工業㈱ 橋口・戸田建設㈱)



桜化一四会を開催

千葉 甲子

61年10月25日(土)午後、大学に残っている同級生の案内で学部祭を垣間見て、もっぱらなつかしの学舎と大きく変貌した施設・設備に心から時の移り変りを感じながら、ここで学んだことに誇りと満足感を得た。

その夜は、開成山の熱田屋で工業化学科の14回卒の同級会“桜化一四会(おうかひとよかい)”の第1回会合を開催。三々五々に集まるなつかしの友の顔に、「お前元気だったのか」と固い握手。今日迄の無事を喜び、社会での友の活躍を知り、果立って20年間の空白が段

々と埋っていく。卒業生126人のうち、今日馳せ参じた者は16名、高木先生も交えて、忽ち何人かの噂の輪が広がり、沢山の消息が聞ける。学生時代にタイムスリップして、心踊りながら昔し話に花を咲かせ、時間の許す限り語り合う姿が印象的である。2次会で想い出深い市内にくり出す。20年の歳月が見知らぬ街になってしまっている。飲むほどに、誰れ彼れともなく、校歌、応援歌、北心寮歌の大合唱となり、なつかしさ嬉しいの感慨に浸る。

翌10月26日㈰は第6回母校を訪ねる会に出席。大学の玄関前で、後輩達のあでやかな色彩の吹奏楽部の歓迎演奏を受ける。懇談会で数多くの恩師や友人と語り合う。それぞれ20年という歳月をくぐり抜け、次回は達者で必ず会おうと約束して、あかしや並木を後にした次第である。

(工業化学科14回卒 福島県立小高工業高校)



電気工学科14回卒クラス会

伊藤 宜世

「母校を訪ねる会」に合わせて、その前夜、61年11月25日に、郡山市開成山の熱田屋でクラス会を開きました。恩師の本間磐教授をお招きして、同級生の参加は17名でしたが、20年ぶりに会う人が多く、夜を徹して話り合いました。翌日は工学部を訪問、工学部長の本郷忠敬教授をはじめ、多くの恩師とも会い、いろんなエネルギーをインプットして再会を約して散会しました。

(電気工学科14回卒 オーデオ開成㈱)



支部・同窓会・OB会だより

第2回「四国支部」総会

谷久嘉典

61年8月2日、本部から半沢忠副会長をお迎えし、高松市で開催。会員40名が出席して盛会でした。遠い四国路から、はるかなみちのくに思いをはせています。（土木工学科第8回卒、有谷久工務店）



北海道支部ゴルフ大会

松久房夫

61年10月10日、体育の日に、日本大学工学部校友会北海道支部ゴルフ大会を、苫小牧市の三井観光苫小牧コースで開催しました。

快晴の秋の一日、佐々木義則支部長以下の13名の会員が参加し、和気藹々（わきあいあい）のうちにも、きびしい勝負がくりひろげられました。入賞者は

優勝 藤井 兼藏（建10）藤井工務店社長
準優勝 松山 忠祐（土14）東急建設札幌支店
でした。（土木工学科第19回卒 札幌市役所水道局）



「茨城北桜建築会」設立総会

鈴木重男

茨城北桜建築会の設立総会を61年10月18日、水戸市内で開催しました。会の方は賛同者79名中39名が出席、大学から小栗治助男教授も見えられ、これひとえに母校を愛し、校友を愛するゆえんであると思います。

久しぶりに会う先輩、同級生、後輩、そして小栗先生とで、昔話やエピソード、近況と時間のたつのも忘れて話し合いました。現在の仕事を忘れて、皆、学生

時代にかえった様子でした。本当に有意義であったと思います。今後も益々校友の親睦を深め、情報交換をし、お互いに協力し合って発展し躍進していきたいと思います。

会の方は小生が会長に推され、その任にあたっています。今後ともよろしくお願ひいたします。

（建築学科第7回卒 鈴木良工務店）



「千葉アカシヤ会」第2回総会

石井和夫

日本大学工学部土木工学科「千葉アカシヤ会」は、千葉県在住の土木工学科卒業生を正会員として、249名の会員で構成され、2年に1回総会を開催して会員の親睦を図っております。

第2回総会を61年9月6日に千葉市のロイヤルプラザホテルで開催しました。来賓としては、土木工学科の赤津武男教授、校友会の武田仁幸会長をお招きし、正会員の参加者は88名を数えました。

総会では、会長に根本亮氏（3回）、副会長に加藤育男氏（4回）と桑山信利氏（6回）を再任し、今後の会運営を行なうことになり、総会後の懇親会は、会員の久し振りの再会などもあり、なごやかなうちに、盛大に行なわれました。

（土木工学科第15回卒 千葉県道路公团）



第6回「後藤同研会」

伊藤 嶽

第6回「後藤同研会」は、61年11月15日、郡山研修会館で開催しました。後藤同研会は工業化学科の後藤高

教授の卒研で構成され、現在270名を数えています。会員の相互交流、技術交流と親睦を目的とし、2年に1回の会合をもっています。

今回は、第4回卒～第34回卒の19名が出席しました。後藤先生から「円高の厳しい時こそ、日大卒業生としての誇りをもって、諸問題に当ってほしい」と要望と挨拶があり、乾杯のあと、若い人から自己紹介と近況報告があり、仕事上のアドバイスやら経済交流などの話が活発にあり、盛会裡に終了しました。最後に校歌を唱和し、次回の2年後に再会を約束して解散となりました。幹事の石井常雄さん(19回卒)に感謝します。

(工業化学科第4回卒、株朝日ラバー)



バレー部創設30周年

第30代主将 佐野 隆

日本大学工学部体育会バレー部は、創設30周年を迎え、61年11月8日、郡山研修会館で記念式を行ないました。この式には、本郷忠敬工学部長をはじめ、武田仁幸校友会会长、中野富士雄学生生活委員長、石田昭二前体育会会长、歴代バレー部部長の諸先生方が出席されました。また、出席下さったバレー部OB（専門部1回卒遠藤繁氏をはじめ19名）に感謝するとともに、部員一同生涯の良い思い出となりました。

この式典を催すにあたって、種々佐藤満夫バレー部部長に任せてしまうことが多かったのですが、部員一同も精一ぱいやりました。先輩各位に喜んで頂き、何よりもうれしく思っています。

30年は一つの節目です。この大きな節目を迎えたのは、バレー部发展のためあらゆる困難を克服してきた先輩のご苦労と熱意があったからだと思います。我々は伝統という言葉の重さをあらためて考え、

更にバレー部の益々の发展に努力することを部員一同で誓いました。
(電気工学科4年)



第2回の「三期会」を開催

高野 操

3回卒の同期会は、全学科(86名)ひとまとめと夫人同伴が特長で、55年8月に続いて、第2回の会合を61年11月25日に磐梯熱海の「よもぎ」で行ないました。

安東弘(自衛隊)太田雄八郎(郡山市役所)佐々木崇(片山鉄工所)鈴木健(石橋工業)鷹簗良一(NTT)武田仁幸(東和工業)田母神武(大黒不動産)平野卓(東京エンジニアリング)藤田正(住友建設)古村和夫(古村建設)松山光克(郡山市水道局)吉田秀明(福島県庁)泉田定美(日本オイルターミナル)矢吹昭(日本たばこ産業)遠藤達雄(郡山北工高)松山儀藏(レストラン村上)と高野の17人、そして奥さんは4人。

夜のふけるのも忘れて、大いに語り合い、明日のエネルギーを充電しました。

(工業化学科第3回卒 日本大学工学部)



窯業化学機械・汚水処理プラント・東京石川式機械浮鉢機



合資会社

佐藤機械工業所

代表社員 佐藤八郎 (機械工学科第11回卒業)

〒507 岐阜県多治見市田代町2ノ37 電話 (0572) 22-5727 (代表)

英 国 の 道 路

上木工学科 石井和樹

英国の道路事情調査のため夏期3ヶ月間ロンドン南部の郊外で、600~700年前に建築された'FLAT'と呼ばれる2階建のレンガ造りで下宿生活を体験した。玄関前には石畳道路が敷設され偶数と奇数番地が左右に分離している。住居地域のため閑静で近くのCOMMON PARKではリスが歩行者専用道路で戯れ、愛犬家の朝夕の散歩、公園のベンチでは老人の語らい、特にパーティー等がない限りは騒音もなく快適な場所であった。道路にはすべて街路の名称が付けられているため希望する目的地まで容易に行動できる。道路を散策すると必ず古き中世時代の趣がひしひしと肌に感じる。そこで道路に纏わる語源を紹介致します。高速道路の'MOTORWAY'に対し一般道路は'ROAD'または'HIGHWAY'と呼称する。その由来は1642年~1649年頃、CHARLES I世と議会の戦いの時以来使用されるに至った。その語源'RIDE'から'RODE'に転化して現在の用語'ROAD'の誕生となった。同様に中世時代'HIGHWAYS'が路面排水問題を解決するため地盤を高く盛土されて以来'HIGHWAY'として使用されている。また街路'STREET'は、当時ローマ人が'VIA STRAETA'と称していたが'VIA'が消去され'STRAETA'に変化、その後'STREET'になった。現在使用されている'PAVEMENT'は歩道の意味で用いられている。その語源は巨石スラブから成るローマ道の表層は'PAVEMENTUM'と称した。同時にビクトリア王朝時代には、多くの石のスラブが使われ'FOOTWAYS'の言葉も使用されたが、その後コンクリート板石を使用するに至って'PAVEMENT'が今日の用語となった。この様に中世時代に誕生した言葉や現存する石畳道路等英國の道路が石材文化と共に一般土木事業が発展した経緯を伺い知る事が出来る。

次に現在の道路事情は日本とどのような点で異なるか特色を述べる。国内至る所に交通案内標識が十分配慮されている。その反面規制標識は非常に少ないためドライバーは、比較的の自由速度で走行出来る。重交通の予測される地域は片側3車線と側帯部分にも1車線相当の側方余裕幅を敷設しているため交通渋滞は少ない。無料の高速道路では、日本と同様車線拡幅工事や維持管理で多くの交通遮断がなされていたが往復4車線を開放しているためスムーズな交通流であった。

駐停車禁止区間は都市部で規制している場所があつたものの比較的少なく、郊外の居住者は車庫もなく一般に路上駐車で道路の約半分を占有している。特殊な駐車方法として道路中央帯に、自転車、バイク専用駐車帯を設けている場合もある。

歩道は約50cm正方形のコンクリート板石を千鳥配列

した個所が多く見受けられた。板石舗装の地下には給配水管等が埋設され、それらの維持、管理を考慮している。道路施工現場を見学する毎に、舗装版の下層土質を手で触れて見たが保有水分は少なく一般に地下水位は深い様であった。各地の歩道に使用されている板石下の材料は肉眼では粘土と錯覚する様な黄褐色の砂材料で、粒径0.84%程度の均一な砂を使用している。



沿道の環境施設帶は、植樹帯やサービス道路を広範囲に採用し特に緑の保護対策には十分な配慮がなされている。その一例として、交通工学上の良否は別として地方道では、巨木が道路側帯範囲まで占有しているにもかかわらず伐採することなく保護している。この様な状況は河川の護岸でもしばしば遭遇した。

道路標識のユニークな標示としては、乗馬が盛んなるため馬走行注意標識、牧場周辺では動物の標識、その他老人保護のために老人歩行注意標識、また簡単なマーキングとして、上り坂のクロス部分に除行又は右折、左折の標示が塗布されている等が見られた。

道路信号機の配線は地中化方式が採用されていて、美観上優れている。信号の現示は単純な表示で交通処理され交差点での複雑な心理的要因は少ない。単純な表示を設置する方法としては、信号機以上に効果的な導流化対策が随所に組み込まれて平面線形計画を机上の空論に終ることなく多く地方部にまで浸透している事が大きな特色と思われる。

最後に英國の道路を総合的に評価すると、耐震設計を必要としない構造物が可能で、急峻な地形が少なく道路土工の作業効率が相当期待出来る等日本の土工条件とはかなりの相違点が認められる。更に歴史的経路例えば馬車交通やローマ道路の築造経験に基づく材料の選定が人為的に適用され長期に渡る経時変化を観測出来る等歴史的発展が現況の道路を築いていると言える。特に学ぶべき事項として生活圏道路の整備を拡大し、人間本来の生活の場としての工夫が随所に認められる。舗装技術のみならず緑多い生活空間の確保、沿道の過大商業広告を排除し、人のための潤いのある生活道路、また信号機設置を極力少なくした平面線形が多種多様に採用され高級な道路へと発展している。

(本会評議員 土木工学科第13回卒)

CAMPUS

mini —— MEMO ——

◇本間先生が定年退職

本間 磐（電）昭和23年9月22日～61年10月3日

長い間のご指導に対して、会員一同、感謝いたしました。

◇工学部の教授陣の紹介

日本大学本部入試事務室では、62年度学生募集のための進学ガイドを発行（450円）したが、その冊子の中に工学部の教授陣を紹介しているカコミがあるので、それを再録しました。校友会報No.43号（59年3月1日発行）とあわせてご覧下さい。

教 授 陣 の 紹 介

工学部は「教育は人なり。」を実践する学部だけに量・質共に多彩な教授陣を誇っている。現在の陣容は専任教授57名、同助教授44名、同講師54名、同助手・副手が15名。これに非常勤の先生を加えると、総勢229名。

これは文部省の基準をはるかに上回る数字である。

その中から何人かを紹介すると、まず学部長の**本郷忠敬教授**はサイリスタによる制御回路の研究で有名。土質工学の**赤津武男教授**は擁壁背面の形状と土圧に関する研究。杉浦孝三教授はコンクリート工学で、ボリエチレン纖維補強コンクリートに関する研究。建築学科では都市計画が専門で、地方都市の居住環境整備に関する研究の**足立和夫教授**。建築構造力学の池田昭男教授は、鉄筋コンクリート構造物の耐震性に関する研究。人間工学の大内一雄教授は、建築計画における人体計測の応用に関する研究。オートクレーブ養生コンクリートの品質改逕を研究している**福地利夫教授**は、建築材料を担当している。

機械工学科では、熱、エネルギーの権威者で、機械学会会長をつとめた**一色尚次教授**。脆性材料の破壊力学についての第一人者の**佐藤和郎教授**。大平五郎教授は金属研究の世界的権威で、日本金属学会会長をつとめた。**青木弘教授**は潤滑学会会長をつとめられて潤滑・摩耗の専門家。**本間磐教授**は単相誘導電動機の研究で電気機器工学を担当。**松塚勇教授**は電磁波工学でアンテナの研究を、半導体工学の**長嶋直之教授**は半導体材料の評価法の研究者である。**宇野原信行教授**は日本分析化学会理事、東北支部長で、無機塗混合物のT・Gを創始し、**高木昭教授**はセラミックス研究に堪能。有機合成の**瀬戸秀一教授**は生物化学、特に酵素を利用するバイオテクノロジーの権威である。

◇自動車部新車庫

旧車庫の老朽化により、新築が要望されていた自動車部新車庫は61年11月18日に竣工、12月8日に引渡式が行なわれた。建物は鉄骨造平家建一部2階建で、収容台数約15台という立派なものである。

◇東北大学野球連盟のアメリカ遠征に参加

東北大学野球連盟発足15周年を記念したアメリカ遠征選抜チームに、工学部から、役員として教務課の佐々木一巳氏、選手として硬式野球部の佐藤輝男、勘角康之、国分新一、浦上浩、大沼伸之、塙野哲幸の計7名が参加した。

一行は11月8日から18日まで、ロサンゼルス、ハイアード米国大学選抜チーム等と4試合を行なった。



◇課外活動各部の活躍（61年8月～61年12月）

○ゴルフ部

北日本学生ゴルフ選手権大会（札幌エルムカントリー）（%～%） 団体優勝 個人優勝 鈴木隆治

○ボーリング同好会

第17回東日本大学ボウリング選手権大会（盛岡ベルプラザ）（%～%） 団体優勝

●以下は全国大会出場

○弓道部

全日本学生弓道選手権大会（日本武道館）（%～%）

○ソフトボール同好会

全日本大学ソフトボール選手権大会（岐阜県下呂町）（%～%） —— 当日、当地在住の佐藤八郎君（機1回卒）から物心両面の援助がありました。 ——

○洋弓部

第25回全日本学生アーチェリー個人選手権大会（駒沢オリンピック公園）（%～%）

○日本拳法部

全日本大学拳法選手権大会（駒沢公園）（%）

○羽球部

第37回全日本学生バトミントン選手権大会（札幌市中島スポーツセンター）（%～%）

○剣道部

全日本学生剣道優勝大会（大阪市中央体育館）（%）
(この項学生課調べ)
(た)

昭和62年3月1日

日本大学工学部校友会会长 武田仁幸

昭和62年度通常総会通知

校友の皆様には、各職域において益々御健斗のこととお慶び申し上げます。

さて本会会則第28条により、日本大学工学部校友会昭和62年度通常総会を下記により開催いたしますので、先輩、後輩お誘いあわせの上多数御出席くださるよう御案内申し上げます。

記

1. 日時 昭和62年4月18日(日) 午後2時
2. 場所 日本大学郡山研修会館(郡山市愛宕町2-22) TEL (0249) 23-4193
3. 議題 昭和61年度会務及び決算報告、昭和62年度事業計画及び予算(案)審議、役員改選、その他
4. その他
 - (1) 諸般の事情により、本号に掲載の上記案内によって総会通知といたしますのでご了承ねがいます。
 - (2) 総会終了後、引き続き同所において恩師を迎える懇親会を予定しております。
 - (3) 研修会館宿泊希望の方は5日前までに母校庶務課(TEL 0249-44-1300代)に申込んでください。

会員総合名簿(昭和62年版)の発行について

校友会の基幹事業の一つである会員管理は、昭和54年5月より電算化を行い、お蔭様で順調に運営されて極めて精度の高いものとなりました。今後とも会員の皆様の御協力方よろしくお願い申し上げます。

さて、会では、会員総合名簿の発行を5年毎と定めていますが、前回は昭和57年発行でしたので本年が発行年次に当たります。そのため、現在電算に入力されている各人のマスターを打ち出し、それを会報に同封し各人に郵送致します。つきましては、その説明のとおり、**訂正のある人は必ず訂正事項を記入し調査票を返送して下さい**。それにもとづいてより精度の高い名簿にしたいと思います。

この名簿の該当者は約27,000名で、大体600頁程度になるものと予想されます。ご承知のとおり経費も嵩みますので、前回同様希望者に有償でお分けすることになりました。**代金は郵送料とも3,000円です**。この名簿の希望者は6月末日までに、この会報に同封してあります「振替用紙」により、郵便局から送金下さるようお願いいたします。これを予約申込書といたします。名簿の配布は9月を予定しております。

また、名簿には「広告」も掲載する予定ですので、何分のご協力をお願いいたします。

なお、不案内な点は事務局におたずねください。
(事務局)

第7回母校を訪ねる会

日時 昭和62年10月25日(日)(予定)

対象 第15回卒業生(昭和42年3月卒業)

該当しない校友の参加も歓迎。なお、前日同級会等開催され多数出席されるようお待ち致します。

日本大学校友会工科系連絡会開催

昨年9月17日、東京ガーデンパレスで理工学部校友会(工科校友会)が担当して第4回連絡会が開かれた。今回は、木下理工学部長、山内、平井生産工学部教授並びに本郷工学部長の諸先生をお招きして各学部の現状と将来の展望等について有意義な講話を戴いた。

中でも、木下先生の米国の大学が「教育の自由化」を求めて日本にくる可能性が濃厚との話があつたが、日大の将来の道にあやまちなきよう関係者の卓見に期待するところが大きい。

さて、会としては、昭和58年以来3学部がそれぞれ担当して一巡したところで、反省と今後のことについて検討した結果、次の2点について合意した。

- (1)校友は出身学部に関係なく日本大学工系出身として共通の問題意識を持っているので、各学部校友会報にそれぞれ他学部校友会の情報を掲載すること。
- (2)運営費は各学部で均等額拠出して、その年度の会を運営する。経理はその担当学部校友会に一任する。なお、これらの詳細と関連事項については、後日協議する約束で議事を終了した。

当会からは、松山日本大学評議員、半沢、武藤副会長、佐藤事務局長、村田事業部長が出席した。

校友会報 第49号

発行部数 31,000部

発行所 日本大学工学部校友会
福島県郡山市田村町徳定字中河原1
郵便番号 963-11
電話番号 郡山(0249)44-1327
振替口座番号 郡山5-1990

発行日 昭和62年3月1日
発行者代表 会長 武田仁幸
編集者代表 事務局長 佐藤光正